

発見に向かわせる学習活動：博物館資料からの展開

前田 真之

(沖縄県立博物館)

Learning Activity Rediscovering Museum Objects:development from Museum Objects

Masayuki MAEDA

(Okinawa Prefectural Museum)

Abstract: Many group tourists come to our museum and they need the help for their study of the museum objects.

we practiced the study plannings how to let them study rediscovering museum objects.

Here I'd like to show the two practices, that are interpretive ways let them study.

The first case is our volunteer's study on religious priestes, called Yokiya Noro.

The second case is study by the student of Ryukyu University.

Finally I conclude that developing the interpretive ways are very important in Japan.

[はじめに]

近年、わが国においても教育普及活動の重要性が指摘されるようになり、さらに生涯学習への高まりを背景に、博物館における学習活動のありかたについても検討する必要が生じてきている。

これまで学習活動の主体というと、小・中・高等学校の児童・生徒がその中心を占めてきたが、最近はその主体が企業であったり、大学、老人会、子供会、学童クラブであったりと広がりを見せてきており、来館者の多様なニーズに対応した多様な学習活動の計画が求められてきている。

沖縄県立博物館では、来館者の多様なニーズに対応する目的からあるいは多くの方々に学習機会を提供する目的から、ボランティア活動事業を平成5年度から導入し、その中で「発見に向かわせる解説」の研修（注1）をボランティアと共に進めてきた。また

ボランティアへの研修の試みをもとに、琉球大学教育学部の田港朝昭先生・里井洋一先生と協力しながら「県立博物館：物をとおして学ぶ」の授業（注2）を計画し、質問づくり→館内の資料を根拠にした仮説づくり→ディスカッションという博物館を拠点にした学習活動を進め、大いに参考になるものがあった。

今回紹介する学習活動の事例は、①ボランティアの解説勉強会で進めてきた「与喜屋ノロ」のケースと、②琉球大学の特別集中講義の際に、鈴木正氣先生・里井洋一先生と協力して進めた「物の観察から『博物館へおいでのよ』を改定しよう。」の二つのケースである。前者の活動は、“見えるものから見えないものへ”をテーマにし、質問づくり→検証（1）：解明部分と未解明部分の整理→検証（2）：歩いて確かめる→まとめという学習活動を進めてきた。

後者の活動は、「物の観察から『博物館へおいでのよ』を改定しよう」をテーマに、個人による疑問づくり→グループ内の疑問づくり→個人による仮説づくり→グループ内の仮説の確認→説得力のある仮説の確定→仮説の検証→ワークシート作成の具体的な提案という学習活動を進めてきた。

この二つのケースを分析しながら、今後博物館においてどのような学習活動を進めていくことが望ましいのか今後のありかたを探るのが、本稿の目的である。

I. ボランティアによる与喜屋ノロの学習

1. 展示を見て質問をつくる：沖縄県立博物館においては、ボランティアの解説勉強会の一環として、これまで“マクドナルドの質問づくり”（注3），“首里那霸港図の屏風”的質問づくり（注4）を行ってきたので、今回の歴史展示室にある与喜屋ノロの写真パネルの学習についても、ボランティアの方たちはある程度見通しが立てられるようになってきている。

これまでの学習活動では、①. 具体的な観察をとおして、観察したものから具体的な質問をつくる。②. 質問の答えを自分たちの力で調べる。③調べて分かったこと、分からぬことを整理し、さらにボランティア内の学習アドバイザーの協力を得ながら次の解明に進むというパターンを踏んできている。

与喜屋ノロに関する今回の学習（1996年3月27日）では、“見えるものから見えないものまで”観察を広げてというテーマで進めてきたが、ボランティアの方たちがどのような質問を作ってきたのか、まず作ったものから紹介していくことにする。

この質問づくりに先だち、ボランティアの方には参考文献を記載した質問づくりの様式を配布し、事前に調べたり、写真パネルを見たりすることも可能な状態にしておいた。

1. ノロが持っている扇の模様には、何か意味があるのか。また王家の印があるのか
2. この扇は、誰がつくったのか。
3. 扇の模様は、地域によって違うのか。
4. ノロのためのかんざしがあったのか。また位によって違っていたのか。
5. 祭事の場合、ノロはかんざしを身に付けていたのか。
6. ノロが頭にかぶっているは何と言うのか。
7. 季節によって、ノロの着物は変わったのか。
8. 中からどんな着物を着ているのか、また素材は何か。
9. 着物の形と着方には、きまりがあるのか、また誰がつくったのか。
10. 玉の大きさや数には、位があり、意味があるのか。
11. 玉の種類は、どうなっているのか。
12. 曲玉のヒスイの産地は、どこか。
13. 曲玉と勾玉とでは、意味が違うのか。
14. 写真の衣装は、どんな時に着るのか。
15. ノロの衣装には、正装があるのか。
16. ぞうりも正装のなかに含まれるのか。またこのぞうりの材料は何か。
17. 祭事の場合には、素足にぞうりをはくのか。
18. このノロは、ハジチをしているのか。
19. このノロは、お化粧をしていたのか。
20. ノロに年齢の条件があったのか。
21. このノロの継承方法は、どうなっていたのか。
22. 祭祀の方法は、時代により変化があったのか。
23. 祭事以外の仕事もしていたのか。
24. 祭事の種類によって、儀式などの方法が違うのか。
25. 祭祀の方法は、地域によって違うのか。

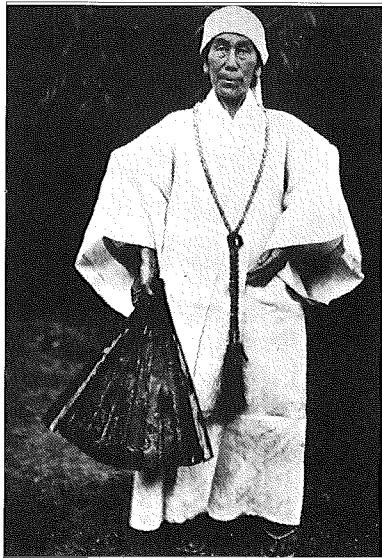


写真1 与喜屋ノロ

26. 祭祀の方法は、沖縄独自のものか。
27. どうして地域の祭祀では、女性だけが神事を扱ったのか。
28. ノロが使用する道具は、一代限りのものか。
29. このノロは、どこの出身か。
30. この写真は、いつ頃のものか。
31. 写真を写した場所は、どこか。
32. この写真は、実物大か否か。
33. 今ノロはいるのか。どこにいるのか。
34. 王府時代のノロと現在のノロとの相違点は何か。
35. ノロが政治と関わりを持ったことがあったのか。
36. ノロに修行が、必要か。
37. 現在のノロの役割は。
38. 神人（カミンチュ）とノロは、同一なのか否か。
39. この写真の人は、何という人。
40. 上からはおっている白い着物は、何というのか。
41. スカートみたいに見えるのは、折り目のせい。それとも袴のように下から着ているものか。
42. この写真を撮影したころのノロの身分は、どうなっていたのか。
43. このノロの名前に、なぜ庵美大島の与喜屋という地名がついているのか。
44. 玉の先についているひものようなものは何か。それには意味があるのか。
45. このノロを現在はだれが継いでいるのか。
46. このノロは、現在の字でいうとどこの字の祭示巳を行っていたのか。
47. このノロが、御願に行った御嶽は、幾つあったのか。また御嶽の名前は何と言っているのか。
48. ノロは、王府時代すべてが辞令書による任命の形をとっていたのか。
49. このノロが任命されたのは、いつか。
50. このノロを任命したのは、誰か。
51. このノロを任命するもとになったという明治14年の役俸規定とは、どんな内容か。
52. このノロは添石に住んでいたが、中城場内や新垣の嶽での祭り事の場合には、どのように移動していたのか。

ここに掲げた質問は、歴史展示室にある「与喜屋ノロ」の写真パネルの前で行ったものであるが、この順番は発表の順番にほぼ沿ったものであるため、ボランティアがどのようなものに先に着目し、発言したのかについても知ることができる。

今回のテーマが、“見えるものから見えないものまで”観察を広げてということになっているので、ボランティアの観察そのものを質問をとおして見ていくことにする。

ボランティアの質問について見ると、与喜屋ノロという具体的な人物について具体的な質問づくりを行ったものは意外に少なく、与喜屋ノロという具体的な人物についての質問には次のようなものがあるくらいである。

6. 頭にかぶっているのは、何というのか。
14. 写真の衣装は、どんな時に着るのか。
29. このノロは、どこの出身か。
30. この写真は、いつ頃のものか。
31. 写真を移した場所は、どこか。
39. この写真の人は、何という人。
43. このノロの名前には、なぜ奄美大島の与喜屋という地名がついているのか。
45. このノロを現在誰が継いでいるのか。
46. このノロは、現在の字でいうとどこの字の祭示巳を行っていたのか。
47. このノロが、御願に行った御嶽は、幾つあったのか。また御嶽の名前は何と言っているのか。
52. このノロは、添石に住んでいたが、中城城内や新垣の嶽での祭り事の場合には、どのように移動していたのか。

上の11の質問をのぞくとノロ一般についての質問が41と多数を占め、具体的な観察をとおして、具体的な質問を作るという点では、不十分さを残していることがわかる。そしてこの質問づくりから見えてくることは、大人の場合“物を直接見る”という活動そのものよりも、自分のこれまでの体験をもとに、自分の頭の中で抽象的に思考したものと写真パネルを関係づけて学習を行っていることが明らかになってくる。この原因としては、ノロに対する既存の知識の少なさが考えられるが、“物の観察をとおして物から学ぶ”ことの重要性は、これからも益々必要になってくると思われる。(注5)

さて、この質問づくりには不十分さがあるものの、この学習活動には次のような点で意義がある。

- ①写真パネルや絵図などには、ボランティアが既存の知識を前提として学習活動に参加できる良さがあり、質問づくりに容易に取り組めること。

②皆が出した質問づくりをとおして、他のボランティアがどのような点に关心を持つてどのような質問を出してきたのか、皆で共有することができること。

③質問づくりをとおして特定の博物館資料に関し視点が明確になり、次の学習活動のイメージが明らかになってくることである。

この質問づくりのあと、次回までに次の参考文献などを参照にして、下調べを行ってくることを申し合わせた。

(参考文献)

宮城栄昌 「沖縄のノロの研究」(吉川弘文館)

宮城栄昌ほか「ノロ調査資料」(ボーダーインク)

鎌倉芳太郎 「沖縄文化の遺宝」(岩波書店)

「琉球国由来記」(『琉球資料叢書1』名取書店)

「よきやのろくもい伝来記」

2. 検証 I (資料等から調べる) : 1996年4月19日の金曜日に2回目の解説勉強会を行った。この日は、自分たちで調べたものを出し合ったり、ボランティア会の学習アドバイザーである宮里朝光さんのアドバイスも受けながら進めていくことになった。質問として出てきたものについては、全て調べてみたが、それらは大別すると①調べて、はっきりしてきたもの、②調べたが、はっきりしなかったものの二つに分けることができる。

<調べて、はっきりしてきたもの>

1. 扇の模様には、意味があるのか。また正家の印があるのか。

(解: 太陽の絵と二羽の鳳凰が描かれている。この鳳凰は稻の種を人間界にもたらしたとされている。裏には月と花が描かれている。)

4. ノロのためのかんざしがあったのか。また位によってかんざしが違っていたのか。

(解: 王府時代に「かんざしの制」ができる。聞得大君は普段は本かんざしとして半月形のかんざしをさすが、大礼のときは竜文黄金かんざしをさす。「沖縄大百科事典」)

5. 祭事の場合、ノロはかんざしを身につけていたのか。

(解: 身についていた。)

6. 頭にかぶっているのは、何というのか。

(解：ミーサージ＜御手拭＞「沖縄文化の遺宝」)

7. 季節によって着物が変わったのか。

(解：中から着る胴衣は、夏は白の上に赤胴衣を、冬は白、赤の上に黄胴衣、綴子胴衣などを重ねる。)

8. 中から、どんな着物を着ているのか。また素材は何か。

(解：ドゥジン＜胴衣＞。女子はカカン＜下裳＞と一組にして着用する。色・生地によって白・赤・水地・紗綾・袷胴衣などがある。「沖縄大百科事典」)

9. 着物の形と着方には、きまりがあるのか、また誰がつくったのか。

(解：きまりがあったと思う。左重ね。)

11. 玉の種類は、どうなっているのか。

(解：玉伽波羅と呼ばれる数珠は、水晶とヒスイからなる。「沖縄文化の遺宝」)

12. 曲玉のヒスイの産地は、どこか。

(解：世界のヒスイの原産地はインドシナ山脈だが、日本では糸魚川周辺あたりになる。芽原一也「ヒスイ文化を読む」新潟日報社)

13. 曲玉と勾玉とでは、意味が違うのか。

(解：玉伽波羅の二個のヒスイのことを曲玉というが、全体については勾玉といっているようである。「(勾玉は) 曲がった玉を中心に、たくさんの水晶の丸玉を連ねたもの」「沖縄大百科事典」)

14. 写真の衣装は、どんなときに着るのか。

(解：ノロの大礼のときの正装である。礼装の際は、裸足である。)

15. ノロの衣装には、正装があるのか。

(解：正装がある。)

16. ぞうりも正装の中に含まれるのか。またこのぞうりの材料は何か。

(解：一概には言えない。久高島では、裸足で行っている。ぞうりの場合は、アダン葉で作られている。)

17. 祭事の場合には、素足にぞうりをはくのか。

(解：一概には言えない。)

20. ノロに年齢の条件が、あったのか。

(解：年齢は、継承の条件にはなっていない。宮城栄昌「沖縄のノロの研究」
174P以下)

21. このノロの継承方法は、どうなっていたのか。

(解：ノロの辞令書によると、地域により継承の方法が異なるようであるが、娘継

ぎの場合は、父系親族内を原則としていたようである。宮城前掲書 176P)

22. 祭祀の方法は、時代により変化があったのか。

(解:変化があった。麦穂祭・麦大祭・田圭払い・稻穂祭・年浴・シヌグ・海神祭など変化があったと思われる。特に島津氏が入ってきてから。)

23. 祭事以外の仕事も行っていたのか。

(解:多くのノロは、普通の百姓と変わらず、自分の畠(ノロクモイ地)を耕していた。しかし労働が提供されることもあった。)

24. 祭事の種類によって、儀式などの方法が異なっていたのか。

(解:それぞれの儀式によって異なる。麦穂祭・麦大祭・畦払い・稻穂祭・年浴・シヌグ・海神祭により異なっていたと思われる。)

25. 祭祀の方法は地域によって違うのか。

(解:違う。)

27. どうして地域の祭祀では、女性だけが神事を扱ったのか。

(解:古来女性が、担ってきた。)

28. ノロが使用する道具は、一代限りのものか。

(解:代々受け継がれてきた。)

29. このノロは、どこの出身か。

(解:中城の添石)

30. この写真は、いつ頃のものか。

(解:昭和2年-1927年に撮影)

32. この写真は、実物大か否か。

(解:実物大ではない。実物よりも大きい。)

33. 今ノロはいるのか。どこにいるのか。!

(解:現在でもいる。ノロの継承方法は地域により違いがある。)

34. 王府時代のノロと現在のノロとの相違点は何か。

(解:王府時代のノロは公儀ノロで辞令書により任命され、土地も与えられた。明治の改革により、ノロの土地は個人名義に登録されてしまった。かつてのような仕事はできなくなり、内容も大きく変わったと思われる。)

35. ノロが政治と関わりを持ったことがあったのか。

(解:君手摺りという神託が、尚清、尚永、尚寧に対してあったといわれているが、やがて政治に影響のないよう1779年地位を世子妃より下位に定めたと言われる。宮城前掲書 148P)

36. ノロには修行が必要か。
(解：修行はあった。)
37. 現在のノロの役割は。
(解：地域全体の祭祀を扱う。地域の私的なことを頼まれることもある。)
38. 神人（カミンチュ）とノロは同一なのか否か。
(解：神人は、村落祭祀の儀礼を執行する者の総称。通常ユタは含まれない。ノロのほかに根神（ニーガン）、撻神（ウッチガミ）、脇神、葉神、ウクディなどがある。)
39. この写真の人は、何という人。、
(解：比嘉カマト)
40. 上からはおっている白い着物は何といいうのか。
(解：ウヒーンス)
41. スカートみたいに見えるのは、折り目のせい、それとも袴のように下から着ているものか。
(解：袴のようなものは、カカン<下裳>と言われる。)
42. この写真を撮影したころのノロの身分は、どうなっていたのか。
(解：明治33年沖縄県知事により任命された琉球王国最後の女神職)
44. 玉の先についているひものようなものは何か。それには意味があるのか。
(解：玉はびるといわれるものの一部と思われる。位により、違ってくるものと思われる。)
45. この（与喜屋）ノロを現在は、誰が継いでいるのか。
(解：次男腹から養子が入り、妻が形式的に祭を行っているにすぎない。「のろ調査資料」85P)
46. このノロは、現在の字でいうと、どこの字の祭祀を行っていたのか。
(解：添石、新垣、泊、照屋、伊舍堂および中城城内)
48. ノロは、王府時代すべてが辞令書による任命の形をとっていたのか。
(解：任命の形を取っていたと思われる。)
49. このノロが任命されたのは、いつか。
(解：明治33年)
50. このノロを任命したのは、誰か。
(解：沖縄県知事奈良原繁)
51. このノロを任命するもとになったという明治14年の役俸規定とは、どんな内容か。

(解：「沖縄県社寺役知役俸飯米等給与ノ件」沖縄県史12巻587P)

<調べたが、はっきりしなかったもの>

2. この扇は、誰がつくったのか。

(解：王府の双紙庫理にある小細工奉行所で作られたと思われる。)

3. 扇の模様は、地域によって違うのか。

(解：琉球王府の支配地域では、共通していたと思われる)

10. 玉の大きさや数には位があり、意味があるのか。

(解：伊平屋、宮古、庵美大島、国頭のノロが使用する水晶玉の数は異なっている。

異なることに意味があるのかについては分からぬ。「沖縄大百科事典」)

18. このノロは、ハジチをしているのか。

(解：年齢からするとハジチをしていると予想されるが、写真では判別しがたい。)

19. このノロは、お化粧をしていたのか。

(解：紅おしろいなどは、していないと思う。)

26. 祭祀の方法は、沖縄独自のものか。

(解：沖縄独自のものである。)

31. 写真を撮した場所は、どこか。

(解：添石のノロ殿内付近で、現在の社会福祉協議会のすぐ裏のあたりと思われる。)

43. このノロの名前には、なぜ奄美大島の与喜屋という地名がついているのか。

(解：よきやは、方言では与座または与謝と言われるが、これと奄美大島の与喜屋とをかけていると中城村史で述べている。おもろそうしにも出てくるが、奄美の与喜屋という地名は不明である。)

47. このノロが、御願に行った御嶽は、幾つあったのか。また御嶽の名前は何と言っているのか。

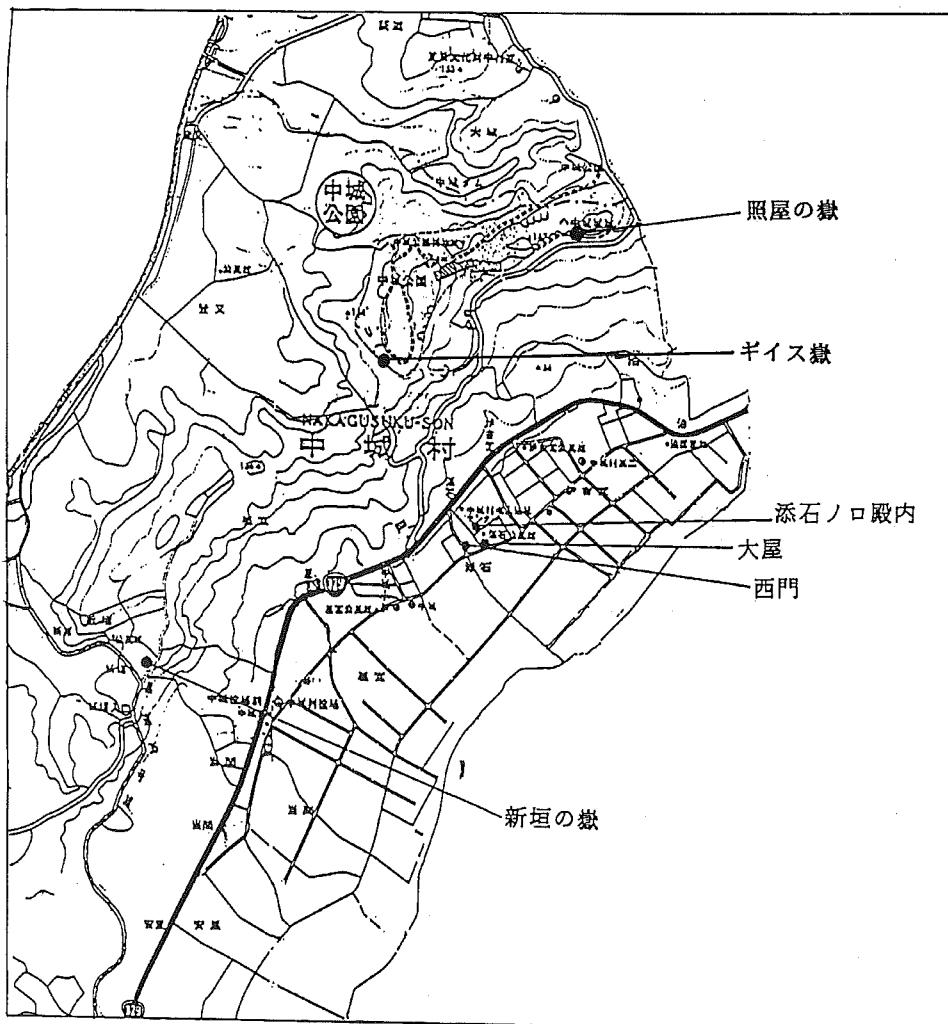
(解：琉球国由来記によると城内に7か所、新垣の嶽を含め3か所、合わせて10か所とある。しかしどの御嶽が城内のどこにあるのか、また新垣の嶽で天次アマタカノ御イベの神を祭るところがどこになるのか分からなかった。)

52. このノロは添石に住んでいたが、中城城内や新垣の嶽での祭りごとの場合には、どのように移動していたのか。

(解：馬で移動したと思われる。1日ですべてを消化したのかは分からぬ。検討の余地あり。)

解説勉強会でお互いに調べていくうちに、ある程度調べがついてきたものと、調べてみたが、はっきり分からぬるものに整理することができた。しかし当初の質問づくりが、与喜屋ノロという具体的な人物に向かうよりも、ノロ一般についてのものが多くなってきたため、調べたものもノロ全般に関するものが増えてきました。

この解説勉強会のあと、31番、43番、47番、52番の分からなかった質問を中心にもう一度調べてみるため、現地研修の計画を組むことになった。



* 第1図：中城城跡周辺地図（この地図は、福岡人文社の「沖縄県広域道路地図」に見学場所を加筆したものである。）

ここに紹介したノロ殿内や御嶽などの分布をとおして与喜屋ノロの行動範囲を考えることができる。

3. 検証II（歩いて確かめる）：1996年5月17日金曜日13時から「与喜屋ノロの拝所を巡る」というテーマで、次の順路でフィールドワークを実施することにした。しかし今回は、時間の制約上、ヨキヤ巫が回ったと琉球国由来記に記されている拝所10か所のうち、照屋の嶽、ギイス嶽（注6）の2か所は除くことにした。

（第1図参照のこと）

- ・添石のノロ殿内跡などを探す。
- ・与喜屋ノロが管轄をしていた添石、泊、照屋、伊舎堂の部落を歩き、部落の位置や距離感をつかむ。
- ・中城城内を回り、琉球国由来記にある「中森ノ御イベ」、「シライ富の御イベ」、「雨乞ノ御イベ」、「小城ノ御イベ」、「ナミナミノ御イベ」、「カワヤグラノ御イベ」、「トモヤグラノ御イベ」、「御當藏火神」を祭る8か所の拝所を確かめる。
- ・新垣の嶽を訪ね、添石、泊、照屋、伊舎堂との地理的なつながりをつかむ。

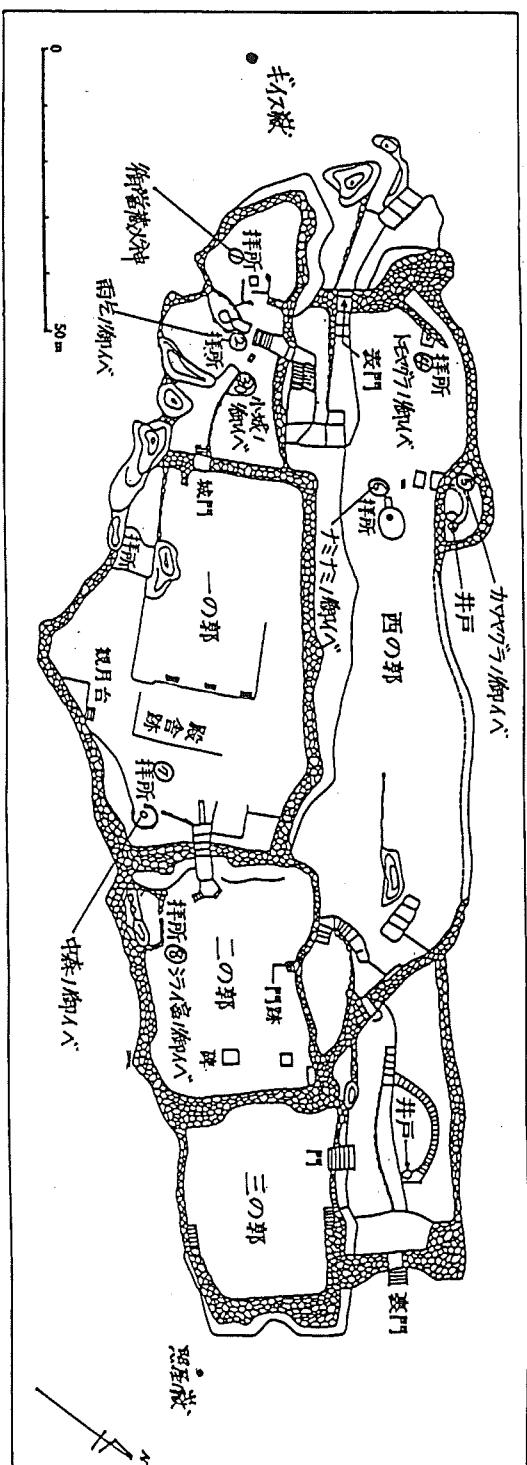
①添石のノロ殿内跡など：国道329号線を西原側から沖縄市方向へ進むと、添石の国道沿い右側に中城村老人福祉センターがある。その正面に向かって、すぐ右端を下に降りて行ったところに添石のノロ殿内があったと聞いて来た。このあたりではなかろうかという話を頼りにその坂道を下っていくと左角に比嘉正徳さんの屋敷がある。その屋敷内を見ると、中に香炉の置かれた小さな建物があることから、ここがノロ殿内跡ではなかろうかと見当をつけた。しかし当日は、比嘉さんがあいにく留守のため詳しいことを聞くことができなかった。後日中城村教育委員会に照会したところ、そこがノロ殿内跡であることが確認できた。

それから坂道をまっすぐ下っていくと、旧道と交錯するところに出る。その左角にある比嘉正育さんの屋敷が、ノロ家と親類関係にあたる元屋で大屋と呼ばれているところである。旧道と交錯したところを右折し、一番目の横筋をさらに右折して右側2番目の比嘉サダさんの家は、西門（イリジョー）と呼ばれ、大屋と並び添石の元屋と言われている。いずれの屋敷内にも離れに小さな建物があるが、沖縄大百科辞典の六月ウマチーの項を見ると「村ではノロ、捷神、根神ら神役が<殿廻り>（祭場の巡拝）をし、それが終わると門中ごとにムートゥヤー（宗家）に集まり、クディの司祭で祖靈を祀る」とあることから推測すると離れの部屋には祖靈が祀られていると思われる。

その後、旧道を経由して伊舎堂、泊の部落を回り、与喜屋ノロの管轄する地域がどのくらいの広がりなのかを歩いて確かめてみた。

中城城跡周辺拝所推定場所

出所：「文化財調査」より



* 第2図：この図は、「文化財調査」の地図に拝所の點を追加したものである。場所の選定は、「よきやのくもい伝承記」をもとに実施。よきやのくもい伝承記では、②南北ノ御内べについては、五門（五折門）の南門の真前、③中森ノ御内べは、番所門より下り見て一番、④カヤマグテノ御内べは北井、⑤ナミナミノ御内べは北井の前、⑥中森ノ御内べは番所くし番門の外とあり、場所の選定が可能。しかし⑦⑧については、中城城跡監査委員会の調査委員である赤坂政臣氏や大城義光氏が推定したものに基づく。この場所の選定については、もう少し検討が必要だと思われる。

②中城城跡の拝所を訪ねる：「琉球国由来記」にある年中祭祀「中城城内之殿」のことを見ると、御殿石階に席を設けて麦穂祭と稻二祭を行うとある。麦穂祭と稻二祭のとき、「ヨキヤ巫ニテ祭祀也」とあるように、旧暦の二月の麦穂祭、五月の稻穂祭、六月の稻大祭のときには、城内ではヨキヤ巫が祭祀を行うことになっている。

さらに照屋村のヨキヤ巫火神や新垣村のウチバラノ殿では稻二祭を、また伊舍堂村の上伊舍堂之殿では麦穂祭と稻二祭を、ヨキヤ巫が行うことになっている。このように見ると、麦穂祭のとき、ヨキヤ巫は中城城内のみならず上伊舍堂之殿も回ることになるし、稻二祭のときにも中城城内のみならず照屋村のヨキヤ巫火神と、新垣村のウチバラノ殿、伊舍堂村の上伊舍堂の殿も回ることになっている。

また城内でイベや火の神を祀る8か所においては、毎年正月十二月に祈願があり、さらに照屋の嶽、ギイス嶽、新垣の嶽のイベもヨキヤ巫が祀ることになっている。

琉球国由来記に記されたことを前提にして、ボランティアが作った質問（すなわち52. このノロは添石に住んでいたが、中城城内や新垣の嶽での祭りごとの場合には、どのように移動していたのか。）を考えてみると、この質問がまんざら的はずれなものではないことが分かってくるし、中城城内を含めたヨキヤ巫の行動範域を念頭において、城内の拝所を見てまわることの重要性が明らかになってくる。

中城城内では、8か所の拝所の場所を回って見ることにした。(第2図参照のこと)

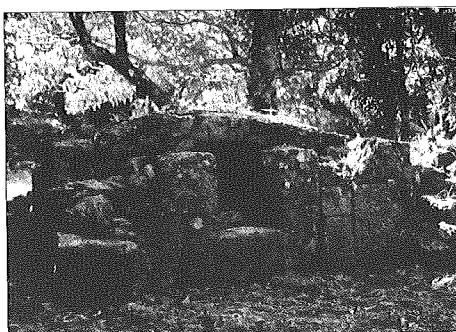


写真2. 御當藏火神 (推定場所)



写真3. 雨乞ノ御イベ (推定場所)



写真4. 小城ノ御イベ (推定場所)



写真5. トモヤグラノ御イベ (推定場所)

この辺りはほとんど遺構が残っていないが、地表部分にわずかにその跡らしい石が見うけられる

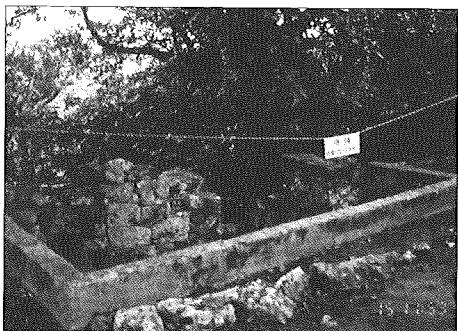


写真6. カワヤグラノ御イベ（推定場所）

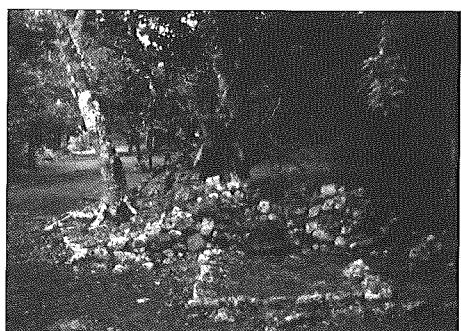


写真7. ナミナミノ御イベ（推定場所）

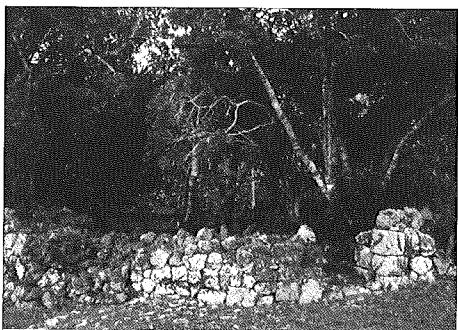


写真8. 中森ノ御イベ（推定場所）

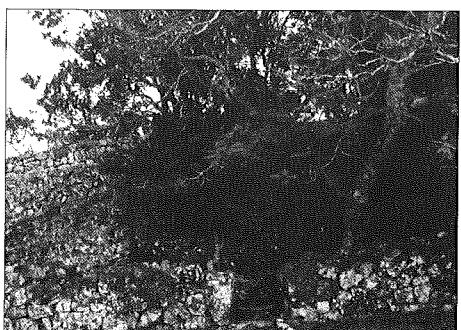


写真9. シライ富ノ御イベ（推定場所）

しかし回ってみて、城郭内のイベや火の神を祀った石囲いや石造りの祠らしきところの場所確認を行ったのだが、琉球国由来記でいうところの8か所がどこなのか特定することができなかつたし、さらにどの拝所にどの神が祭られているのかもはっきりしなかつた。また御當蔵火神については、由来記では巫祟之無シとあるので、城内ではヨキヤ巫が回るところは7か所ということになってくるが、「53. 城内祭祀のときには、この7か所全てをまわったのかな」という質問も出てきた。この後、車で新垣の御嶽に向かう途中、中城から新垣に延びている尾根づたいの道を確かめた。現在、この道は宅地造成などで途切れてしまっているが、かつては首里王府から南・北上原を経由して、新垣の御嶽の東側から中城城につながる東宿であることが確認できたし、与喜屋ノロがこの道を通って、新垣のウチバラノ殿に行った方が、最短距離であることが推測できた。

③新垣の御嶽を訪ねる：中城城跡から車で新垣に向かうには、二つのルートがある。一つは、中城城跡から国道329号線に下り、奥間から県道34号線を上って新垣に行くルートであり、二つ目は県道146号線で北中城の荻堂・登又経由で新垣に行く

ルートである。今回は、後者のルートで新垣の嶺に出発したが、車で行くとこの間の距離が随分長いことに、ボランティアの方たちは気付いた。

新垣から中城につながる東宿から新垣の嶺に登っていくと、足の踏み場もない向う側に殿が見えてきた。(写真10) ここは、琉球国由来記によると新垣のウチバラノ殿と言われているところだと思われる。沖縄大百科事典によると「殿と称するところは主として沖縄本島南部とその周辺離島である。場所は、・・・、その多くは御嶺に近い広場である。・・・殿には石の香炉が置かれ、場所によってはイベ（イビ）が祀られ、あるいはそのそばに地頭火神祠が設けられているところもみられる。祭祀を始めるにあたって、まず召請するする神のいる御嶺に向かって遙拝が行われることによって、その部落の神の御嶺所在地を知ることができる。殿とそこに召請される神とは対応する・・・」(太字は、筆者による。)

ここに記載されたものをもとに殿を見ていくと、まず入り口が二つあることに気付く。それから中に入っていくと、内部の左右に火の神が二体あり、石の香炉も二つある。どうして火の神が二つあるのかについては、地元の人にもうすこし詳しく聞いてみる必要がある。(写真11)

この殿を正面に見ながら左横の方から上に登っていくと、拝所らしきものが少なくとも二つはある。(写真12・13) その一つは、金満ウタキと記したもので、もう一つ

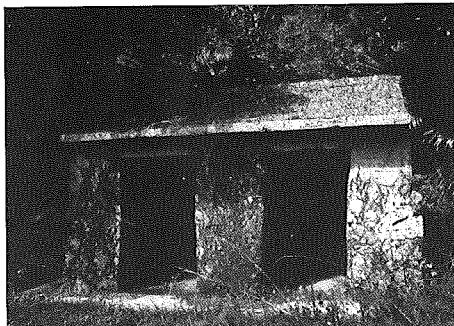


写真10. 新垣の御嶺の殿

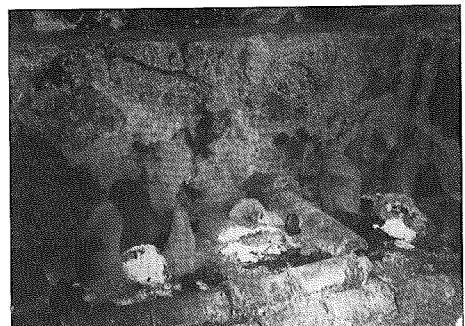


写真11. 新垣の殿の内部

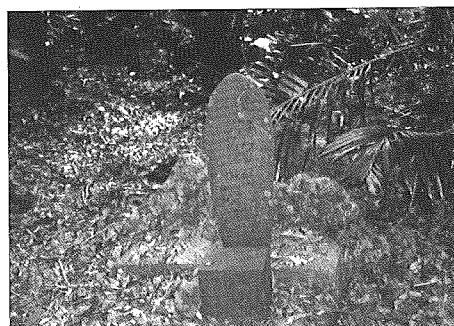


写真12. 新垣の御嶺の拝所



写真13. 新垣の御嶺の拝所

は天継と記したものである。両方とも比較的新しく作られた印象を受けるが、由来記にある神名「アマタカの御イベ」は、もともとこの御嶽内のどの場所に祀られていたのかその日の探索だけでは判断することが困難であった。史料などでは、一見自明のように見えたものでも、実際来てみるとそれでもはつきりしないものが数多くあることをボランティアの方たちは、体感したことと思う。

4. 与喜屋ノロ学習の課題：今回の学習は3回で構成し、①写真パネルを見て質問づくりを行う、②資料から調べて検証を行う、③歩いて確かめる活動を行う、を進めてきた。今回は、“見えるものから見えないものまで観察を広げて”というテーマで、写真パネルの具体的な観察をとおして与喜屋ノロの具体像に迫る学習活動を行うことであった。この中で、幾つかの課題も生じてきているが、学習の中で体験したプラスの側面もあるので紹介しておく。

(プラスの面)

1. 観察の中で、具体的に見ていくことの大切さを痛感したことである。質問づくりを見ると写真パネルから出発するよりも、自分の頭で考えた抽象的な思考が強いことが明らかになっている。写真資料に迫り、与喜屋ノロに関し具体的なイメージ化を図るためにには具体的な質問づくりの必要性を感じたのではなかろうか。具体的な質問は、調べ学習の中でもその本人の問題意識を鮮明にするが、抽象的な質問例えば“祭祀の方法は沖縄独自のものか”などの質問は間口が広く漠然としていて、この後の展開には方法論的な整理が必要になってくる。

2. 質問づくりを文献で調べて分かったつもりのものが、野外踏査に出ていざ調べてみると確定できないものがたくさんあり（例：中城城内の拝所の位置確認、新垣の御嶽の位置確認）、そのことからフィールドワークの必要性を感じたこと。

3. 野外踏査に出て実際に歩いてみたことで、イメージが具体的になってきたものに、“祭祀のときのノロの場所移動などがある。”さらに拝所を回る順路に関する質問なども、この踏査の中から生まれてきている。後の調査で分かった照屋の嶽やギイス嶽までをも見学の中に組み込むことができれば、ノロに関するイメージがより正確さを増したと思われる。

しかしここで得た教訓を生かし、さらに発見に向かわせるためには、次の課題を克服していくことも必要である。

(課題)

1. 野外踏査の成果も踏まえて、新たに何が分かり何が分からなかったのかまとめの

整理を行うことである。例えば後日の調査で分かった太平洋側の城壁下にある照屋の嶽や表門よりはるか南側部分にあるギイス嶽の存在は、ノロの行動範囲を考えるとき、イメージをより具体化させてくれるものと思われる。

2. そして未解明部分の探求のために、次に何をすべきか、またどのような支援を行っていくべきかを明らかにしていくことである。

たとえば与喜屋ノロの場所移動の手段については、久米島のチンバーの記録写真を手がかりにしてみると、中城城内の拝所の位置や正月などの御立願などのときに回る順路、拝所の特定については、「よきやのろくもい伝来記」をもとに分析を試みるとかのアドバイスを送ることが次の支援として考えられうるであろう。例えばシライ富ノ御イベは「番所くし御門の外」、小城ノ御イベは「番所門より下り候て一番」、雨乞ノ御イベは「右同下の御門の真ん前」、カワヤグラノ御イベは「包井」、ナミナミノ御イベは「包井の前」、中森の御イベは「番所くし」とあることから、目安となる番所の場所がはっきりすれば、そこを基準にして場所の推定が可能となってくる。

3. このような手立てを行っても、それでも解明できない部分が出てくることも予想されるが、それは逆に次の学習へのステップに繋っていく側面もあると思われる。
ただ43番の質問に出てきた与喜屋ノロの与喜屋という地名が奄美大島のどこにあるのかについては解明できなかった。

II. 「物の観察から『博物館へおいでよ』を改定しよう。」の学習

博物館資料をもとにした「物の観察から『博物館へおいでよ』を改定しよう。」の学習は、1996年7月10日に沖縄県立博物館で行われたものである。この授業は、琉球大学教育学部における鈴木正氣先生の集中講義「社会科要説」の授業の一環として行われ、鈴木正氣先生、里井洋一先生と三者による調整のもとで計画を進めた。

1. 学習活動の手順：このテーマで学習を始める前に次のような手順を明らかにした。

◇学習活動は、次のようなワークシートの項目で勧めることにする。

- ①. 物をよくみて疑問に思ったことを下に書こう。
- ②. あなたのグループの人が疑問に思ったことを書こう。

- ③. 上記の疑問にたいする答えを仮説の形で書いてみよう。
- ④. あなたのグループの人が提示した仮説を書こう。
- ⑤. 仮説をぶつけあってどの仮説に説得力がありましたか。
- ⑥. 仮説を勉強するために博物館の中の他の展示物や県立図書館や琉球大学の図書館で調べたことを下に書きましょう。
- ⑦. 以上の作業とこの2日間の講義からえた知見にもとづいて、『博物館へおいでよ』の該当部分を改訂して、下記に示せ。

◇学習の対象となる博物館資料を次のように設定し、8グループにより選択をしました。

- ・万国津梁の鐘（ロビー）
- ・港川人（歴史展示室）
- ・進貢船（歴史展示室）
- ・首里那霸港図の屏風（歴史展示室）
- ・江戸上り行列図（歴史展示室）
- ・織物（美術工芸室）
- ・バーキとティール（民俗展示室）
- ・丸木舟とハギ舟（民俗展示室）

2. 学習の様子をワークシートに見る。：それぞれのグループでどのような学習を展開しているのか、グループの中から代表的なものを取り上げ見ていくことにする。
 ＜万国津梁の鐘グループ：グループよりも個人の仮説が調べ学習で影響したケース＞

①物をよくみて疑問におもったことを下に書こう。

	物をよくみて疑問におもったこと
福地さん	<ol style="list-style-type: none"> 1. いろんな字が刻まれているのはなぜか。 2. 万国津梁とはどういう意味か。 3. つり鐘の部分が、龍のようなものには意味があるのか。 4. 花がらの紋章のようなものは何か。 5. 大きさに意味があるのか。 6. どれくらいの重さか

圖師さん	7. 普通の鐘と違つて黒がかっているのはどうしてか。 8. あちこちの破損のあとは 9. 龍のようなものがほられたのは、何の意味があるのか。 10. こんなにおおきいのにどうやってはこばれたのか。どこで作ったのか。
岩谷さん	11. どこでつくられたのか。 12. 何故このような事が鐘に記録されたのか。 13. この鐘に示された貿易の内容は 14. 今の鐘との違い、他地域の鐘との違い 15. ほとんどの鐘がこの年代に鋳造されているのは何故か。
西平さん	16. どこで造られ、どこから産出した材料（鉄）を使用したか。 17. 誰が造ったか。 18. なぜ王の名前は、ほっていないのか。
松林さん	19. イボイボはなぜついているのか。 20. ドラゴンと龍柱のカンケー 21. 書いてある文字は何を意味する。

5名の学生の質問を整理してみると、A. 鐘の形態やその意味に関するもの（1・3・4・5・6・7・8・9・19・21）、B. 製造者・製造方法・原料に関するもの（11・16・17・18）、C. 鐘の運搬に関するもの（10）、D. 銘文の内容に関するもの（2・12）、E. 別の鐘との比較や同時代における鐘の製造を前提にしての質問づくり（7・8・14・15）に分類することができる。ボランティアの質問づくりと比較すると形態に関する具体的なものに目を向けていることが分かる。銘文の内容そのものに関する質問は、少ないものの、他の資料との比較や同時代の鐘の製造に関する認識の上に成り立つ質問づくりも出ていることが分かる。

②あなたのグループの人が疑問に思ったことを書こう。（この内容については①で紹介してあるので省略をすることにする。）

③上記の疑問にたいする答えを仮説の形で書いてみよう。

	答えを仮説の形で書いてみよう。
福地さん	鐘をつくるように命じた尚泰久王は、鐘にいろいろな思いをはせて、とても大きくつくり、その思いを文字に刻んで、それを城につるすことにより王・国の偉大さを表していたのではないか。つり鐘の龍は、首里城の龍柱と同じようにシンボル的な役目をしており、そういう細部にまでこまかく注文をつけて、外国でつくらせたのではないだろうか。
圖師さん	尚泰久王の名が刻まれていないのは、尚泰久王がつくらせたものではなく、沖縄でつくれたものでもなく、誰かのつくれたものをとりよせたか、あるいは日本や中国でつくれたのではないだろうか。そして船で運んだ。 万国津梁の鐘をつくれたのは、当時の中国と日本との関係がうまくいっている状態が永遠につづくよう願ってのことである。

福地さんと圖師さんの仮説を比較してみると、グループで共有した質問のうち両者とも国王の鐘に込められた意図のようなものや製造場所に焦点が当てられていることが分かる。

④あなたのグループの人が提示した仮説を書こう。

- ・どこでつくられたのかというのを日本でつくれたと仮定し、船で運んだとすれば二そうではこんだのではないか。
- ・つりさげるところがきずついてないから、なわでつるしたのだと思う。
- ・鐘に思いをはせ、鐘に王や国の偉大さを表したかった。
- ・龍を注文したのはシンボルであったから。
- ・国の祭事に鳴らした。
- ・砲弾ではなく、破へんがとれてきた。

・尚泰久王の名がないのは、一般的に鋳造されたから。

⑤仮説をぶつけあってどの仮説に説得力がありますか。その理由を書いてみましょう。

仮説 1 「尚泰久王が、万国津梁の鐘をつくらせたのは、当時の中国と日本との関係がうまくいっている状態が、永遠に続くよう願ってのことではないだろうか。そういう意味でも、この鐘には同時期に鋳造された鐘の中でも大きな思いをはせていたのではないか。」

理由 「銘文の意味からもわかるように、この鐘の銘文は琉球国の現在の栄華を鼻高々に記してあり、その栄華がいつまでも続くよう願って、神聖なる鐘に万国津梁の鐘をつくらせたのだと思う。」

仮説 2 「尚泰久王の名が鐘に記されていないのは、同時期に鋳造された他の鐘と同じようにつくられたためで、日本や中国などからとりよせるか、あるいは鋳造する人を呼び沖縄でつくらせたかそこはわからないが多くの梵鐘がその時期につくられたことを表しているのではないだろうか。」

理由 「日本や中国からとりよせる場合、船をつかうということになると、梵鐘の重さに耐えれる船があったかというと疑問であるが、何らかの同じ方法で多くの梵鐘がその時期につくられたのではないかと考えたため。」

仮説 3 「梵鐘は仏教の法具であるから、このころ琉球国に仏教が繁栄したことを表しているのではなかろうか」

理由 「記載なし」

説得力のある仮説とその理由という項目を書いているのは5名のうち2名である。もう一人の仮説は「1. 藤原国善が鐘を造った。」その理由は「鐘にきざんでいた。」「2. 沖縄で造られた。」その理由は「どの本にも尚泰久王の命で鋳造させたとあるから。藤原国善の作とあるから、中国で造ったとは考えられなく、日本か琉球のどちらかになる。日本で造って琉球にはこぶよりも、琉球でつくった方が安全確実だと思う。」「3.

中国産の青銅で造られた。」その理由は「琉球では銅が産出するという事を聞いたことがないから琉球ではない。日本か中国となるが琉球は中華貿易をやっていて、日本よりは中国の方が親しいし、大量に産出する中国の方がやすいのではないかと考えた。」となっている。そのほかのものは、グループでぶつけあった中から出てきた説得力のある仮説よりも、自分のたてた仮説への関心の方が強くなっている。

⑥仮説を検証するために博物館の中の他の展示物や県立図書館や琉球大学の図書館等で調べたことを下に書きましょう。

仮説1・2について

- 「……
- ・数多い梵鐘の中でも一つだけ大きわだって大きいこの梵鐘は、高さ154.5cm、口径94cm、重さ約600kgである。これは琉球に限らず中世以前一般の梵鐘からみても大きい。→“思いの大きさがわかる”
 - ・鐘に刻まれている銘文についてみると、独自の文章で記されているのは、この鐘だけである。あとわかっている19口の鐘には<君臣道合 蛮夷不侵>が入っている。」

仮説3について

「銘文のねらいは、王法（政治）と仏法（仏教）を一体にして国を繁栄させることである。それを尚泰久王の政治によって実現するとうたっている。仏教の法具である梵鐘を一つの行政体制の中核をなす殿堂に掛けたのも、王法仏法の融合である。……」

この調べ学習を説得力のあった仮説にしたがって進めるのかそれとも自分の仮説にしたがって進めるのかに分けて考察すると、二名が前者で、残りの三名は後者というふうに分かれている。しかし後者の場合、自分の仮説にしたがってまとめたというよりも、資料からそのまま書いたかたちになっており、仮説と調べたものとの関連性がやや不明な内容となっている。グループ内での話し合いが、やや不十分で、共有部分を十分に持ち合わせることが少なかったことを物語っている。

⑦以上の作業とこの2日間の講義からえた知見にもとづいて、『博物館へおいでよ』の該当部分を改訂して下記に示せ。

この部分について改訂案を提示したのは、五名のうち三名で、残りの二名は万国津梁の鐘の説明ですませている。ここでは福地案と岩谷案の二つを紹介しておく。

(1) 博物館ロビーにある「万国津梁」について

①「万国津梁の鐘」にはどのような特徴があるでしょうか。

- ・大きさはどうですか。
- ・いつ頃、誰によってつくられたのか。
- ・どこにかけられていたのでしょうか。

②鐘を描いてみましょう。

③知識を深めよう。(万国津梁の鐘を祥説)

博物館ロビーにある「万国津梁の鐘」を見てみよう。何がわかる?

*梵鐘の絵と部分の名称を書き、さらに銘文を小学生が分かるよう読み下し文にしてある。

○万国津梁の鐘と博物館にある他の鐘と比較してみよう。(色・形・大きさ等)

違っていたら何故違うかを考えてみよう。

○他の国や日本において違った形式の鐘がないか探してみよう。

ここで紹介した改訂案は、①鐘の形態についての比較検討、②銘文の内容理解という点では、元のものとの違いはない。違いは外国の鐘との比較が加わっているところである。

<江戸上り行列図ほか：グループの仮説が調べ学習で影響したケース>

①物をよく見て疑問に思ったことを下に書こう。

物をよくみて疑問におもったこと	
宇都さん	・楽童子は男か女か
比嘉さん	・ぼうしの色に関係あるのか・
山木戸さん	女の人は、どうしていなかったか ・着物はどうして色がちがうのか。 ・薩摩の役人や人足がどうして多いのか。
安村さん	・女性は行列に連れていけなかつたのか。 ・楽童子は何者か。

	物をよくみて疑問におもったこと
西原さん	<ul style="list-style-type: none"> ・何故日本風の着物でなく、中国風の着物なのか。 ・何故薩摩の多くの役人、人足が行列に参加したのか。 ・何故船で江戸まで行かなかったのか。
屋宣さん	<ul style="list-style-type: none"> ・江戸上りのとき、めしはどこで食べたのか。 ・服は洗たくしているか。 ・雨がふっても歩いたのか。 ・みこしをかついでいる人は疲れたか。 ・赤いかさみたいなのは何か ・ほうきみたいなのは何か。
當山さん	<ul style="list-style-type: none"> ・中国風の服を着ているのはなぜか。 ・江戸に行くのは、直接行ったのか。ルートは ・中心部の習字しているのは何？ ・江戸上りはなぜ義務？ ・ぼうずがいるのは何？ ・京判升を使用させたのか。
伊波さん	<ul style="list-style-type: none"> ・なぜ中国風の行列なのか ・なぜ300日もかかるのか
伊波さん	<ul style="list-style-type: none"> ・舞楽団でなぜ3人もお茶を？のんでいる人がいるのだろう。 ・なぜ船でいかなかったのだろうか。 ・途中で合流するさつまはんの役人や人足たちの費用も琉球が出ていたのだろう。 ・行列での着物の色は役割ごとに違うのだろうか。またさつまの役人は行列ではどのところにいたのだろう。
辺土名さん	<ul style="list-style-type: none"> ・中国貿易の利益は薩摩に取られていたのに、何故大規模行列ができたのか。 ・滞在中はどこにいたのか。 ・何故ぞうりではなく、皆くつだったのか。

辺土名さん	<ul style="list-style-type: none"> ・何故中国風の行列にわざわざしたのか。 ・楽童子の身分は？男か女か？
小屋敷さん	<ul style="list-style-type: none"> ・出発から帰国まで300日となぜそこまで長い旅となつた？ ・なぜ馬が一頭もない。 ・ひょうたんをつけている人は、なぜ少數か。 ・江戸時代は、かごが主流であるのに、なぜ御輿に乗っているのか。 ・本来警護が目的であるはずのともが、武器らしき武器を携帯していないのはなぜか。 ・数百人も連れていく必要があったのか。 ・服で手を隠すのに意味があるのか
我如古さん	<ul style="list-style-type: none"> ・女の人はどうしていなかったか。 ・どうして中国風の行列をつくったか。 ・薩摩の役人や人足はどうして多かったか。

11名の学生の質問を整理してみると、A. 楽童子の性別を問うもの（1・3・6・733・41）、B. 行列への参列者の服装に関するもの（4・8・17）、C. 薩摩の役人や人足に関するもの（5・9・28・43）、D. 江戸上りのルートや滞在に関するもの（10・18・24・26・30・34）、E. 行列のスタイルに関するもの（23・32）、F. 江戸上り行列図の具体的な観察に関するもの（12・14・15・16・19・21・22・25・31・35・36・37・38・39・40）、G. 江戸上りの役割に関するもの（20）H. 江戸上りの財政的な負担に関するもの（27・29）、I. 江戸上りの観察から連想したこと（11・13）、J. 意味不明（2）に分類することができる。この分類のうちA・B・C・E・Fは、江戸上り行列図等の具体的な観察をもとにしたものであるが、D・G・H・Iは絵そのものの観察から得られる疑問ではなく、絵の観察やそれに関するこれまでの自分の既存の知識と関係づけて初めて成り立つ疑問である。

②あなたのグループの人が疑間に思ったことを下に書こう。（この内容については、①で紹介してあるので省略をする。）

③上記の疑問にたいする答えを仮説の形で書いてみよう。

答えを仮説の形で書いてみよう。	
宇都さん	<ul style="list-style-type: none">・行列の服装：薩摩が自分の勢力が異国にまで及んでいることを示すため。・女は連れて行かなかったか：身のまわりの世話が必要なため連れて行った。
比嘉さん	<ul style="list-style-type: none">・ひょうたんは酒（泡盛）だったので、それを上の人（役人）に捧げる。・当時、女の人は連れて行かなかった。漁師の妻が漁に出かけなかつたことと同じことで危険だったから。・中国風の服装：中国風にしないと、薩摩の人と同じよう分からぬ。はっきりと琉球と薩摩の区別をつけ、身分をつける。
山木戸	<ul style="list-style-type: none">・着物の色によって身分の違いを現しているため。・大名行列と同じで歩いていかなければならなかつたため。・女の人がいないのは、当時男尊女卑の傾向があったため。・琉球の楽器もあるし、中国やその他の国の楽器もあったのでは
安村さん	<ul style="list-style-type: none">・（楽童子の身分）男であり、身分もかなり上の方である。・（船で江戸まで行かなかったのは）当時の船では海は危険であったため。・（薩摩の派遣者がいたのは）琉球の人が逃げ出さないため監視として
西原さん	<ul style="list-style-type: none">・（薩摩の役人の行列への参加）琉球の人日とに、自分達は薩摩に支配されているのだと認識させるため
屋宜さん	<ul style="list-style-type: none">・（なぜ中国風）中国の力は強大だ。その影響はすごい。だからいたるところに中国風が、かかわっている。

屋宜さん	<ul style="list-style-type: none"> (なぜ船で江戸まで行かなかったのか) 船は沈むのがこわいから、歩いた方が良い。 (なんで習字してる) 字は歌、坊主は歌人。 (着物の色はなぜ違う) 琉球人の逃亡を防ぐため
當山さん	<ul style="list-style-type: none"> 中国風なのは、薩摩が自分の権威が中国の及んでいるように見せるため。 船で江戸に行かないのは、通ってくる藩に見せつけるため 着物の差は、身分の差によるものではないか。 薩摩人が多いのは、琉球人が大勢でくるのは大変だから。 楽器は、中国のものも入っていると思う。 みこしに乗っているのは、中国風にするため。 赤い傘は、(目印の) 旗のかわりではないか
伊波さん	<ul style="list-style-type: none"> (中国風の行列) 中国との貿易がさかんな琉球も、幕府の属国だと諸藩に知らせるため (船で江戸に行かないのは) 陸を歩くことによって、その藩のお金を使わせ、大きな勢力をもたせないようにするため。 (薩摩の役人や人足) 一応、琉球は薩摩の領土なので、その領主である薩摩の役人もついていかなければならなかつた。
辺土名さん	<ul style="list-style-type: none"> (中国風の行列) 日本の支配力が異国にまで及んでいることを見せつけるため。 (楽童子の身分・性別) 士族。(歌舞伎の女形のように男だったのではないか。) (薩摩の役人の付き添い) 実質的に薩摩の支配下にあることを示すため (行列に女性の参加者はいたのか) いたと思う。身の回りの世話など (着物の色の違い) 身分を表している。 (何ゆえ直接船で江戸まで行かなかったのか) 船旅は危険だし、より多くの人に見せたいから。

小屋敷さん	<ul style="list-style-type: none"> なぜ中国風の格好をしているのかは、もしこれを意図的とみなすならば、幕府が諸藩、民に幕府の権威、勢力は他国にも及んでいることを示したかったから。 (なぜ船で行かなかったか) 薩摩藩の強制 (かごでなく、なぜみこしか) これは見せびらかす、“さらし”の意味が込められている。
我如古さん	<ul style="list-style-type: none"> (薩摩の役人や人足) 薩摩の役人が多いのは盜賊から身を守るために琉球の人が逃げないようにするため。 (着物の色の違い) 着物の色のちがいは身分の差を表す。 (なぜ船でそのまま江戸まで行かなかったのか) 船を使わないので、琉球にお金をつかわせ、勢力をもたせないため

このグループの一人一人の仮説を見ると、楽童子の性別を問うもの、行列への参列者の服装に関するもの、行列のスタイルに関するもの、江戸上りのルートや滞在に関するもの、薩摩の役人や人足に関するものが、ほぼその中心を占めている。グループの人が疑問に思ったことを書き記す中でそれぞれの疑問部分が共有され、それに対応した形の仮説設定がそれぞれの部分で進んで行ったことがうかがえ、グループ学習がうまくいくていることが伝わってくる。

④あなたのグループの人が提示した仮説を書こう。

このグループのそれぞれがまとめたものは、話し合いによる共有でほぼ同じ内容になっている。ここでは、宇都さんが、まとめたものを代表という形で紹介する。

(行列の服装) 薩摩の権威が他国に及んでいることを見せるため。

(船でいかない) 行列で薩摩の力をを見せつけるため。

(着物の色の違い) 身分の差によるもの

(着物が古い) それしかないから

(かごじゃなくてみこし) 薩摩が自分の勢力は異国にまで及んでいることを示すため

(女は連れて行かなかったのか) 身の回りの世話が必要なため連れて行った。

(楽童子は男か女か) 馬に乗っているから男

(楽器) 琉球のもの、中国風。

⑤仮説をぶつけあってどの仮説に説得力がありましたか。その理由を書いてみましょう。

仮説 1 (行列の服装は) 薩摩の權威が他国に及んでいることを見せるため

理由 「わざわざ中国風の服装をさせることはないし、大勢の薩摩の人足や役人を連れてまでの行列をつくって行く必要もないと思う。」

仮説 2 書道をしている人が歌を詠んでいるというのは、説得力があると思う。

理由 「茶道と共に、坊主人のを歌人と仮定すると、その場面によく合うのである。」

仮説 3 舞楽団で使っている楽器は、中国伝来の琉球のもの

理由 「その当時、琉球は中国の影響をとても受けていたため、楽器などもその影響を引きずっているのではないか」

仮説 4 陸路なのは、金を使わせて琉球が勢力をつけさせないように

理由 明記せず

仮説 5 「かごではなくみこしなのは、琉球の使者をさらしものにするため」

理由 「やはり琉球は島津の配下なのだというのを知らせるため」

仮説 6 (楽童子は) 士族で男ではないだろうか。当時歌舞伎の女形のように芸をするのは男でそれも公式の場でも通用するような芸の持ち主なら、教養を身に付けた人物であろうと推測される。このことから士族であろうと思われる。

理由 「当時の風潮まで考えられているから」

仮説 7 「(薩摩の役人や人足が付添っていたのは) 盗賊などから行列を守り、なおかつ琉球人が逃げないように。形式的には幕府の支配下となっていても、実質的には薩摩の支配下にあることを示すため。」

理由 「琉球人が逃げないようにというのを考えつかなかった。確かに逃げられて、薩摩の仕打ちを口外されたら困るだろうということを考えたら納得した。」

ここに紹介したものは、11名それぞれが書いたものをまとめたものである。仮説1に触れたものは6名、仮説2は2名、仮説3は1名、仮説4は1名、仮説5は1名、仮説6は3名、仮説7は1名となっている。行列の服装をとおして、その背後にあるものへの関心がグループ内ではかなり強かったことが明らかになっている。

⑥仮説を検証するために博物館の中の他の展示物や県立図書館や琉球大学の図書館等で調べたことを下に書きましょう。

仮説1について（安村さん）

「風俗・言語・習慣は本土人と同一視してはならない」という指示が琉球使節が出発する以前に島津から出ていた。すなわち異国的情体を奨励して上洛せしめたのであった。六代将軍家宣の承認を慶賀する琉球使節の上洛の前年（宝永六年）には風俗をはじめとして、道中の宿幕も繻珍などで中国風にするようにとの詳細な令達を下した。

このために琉使一行の江戸参府時の行列の役名もすべて中国式に、正使、副使、贊議官、楽正などと中国名で訓ませていた。このように異国情調を存分に鼓吹させて登城し、さらにこの行列の前後は薩摩役人警固しながら参府していた。これは琉球使節の往来に際して、島津氏が自己の権勢を誇示したものであった。いわゆる海外の一小王国を自らが統治しているという事実をわが国内の諸侯の誇示したのであった。また対幕政策においても・・・自己の外様大名としての立場を少しでも軽くするためにも、この忠誠心の發揮はこの上なく有効なものであった。」（『近世薩琉関係史の研究』）

仮説2についての調べなし

仮説3について（山木戸さん）

「使者の行列の服装、これに伴う奏楽はすべて中国風であり、異国の行列として人々は目を見はり、耳をそばだてた。行進中の奏楽は路次樂といい、銅羅、両班、哨吶、喇口八、銅角、鼓から成っていた。音楽器と打楽器の編成で、日本人の耳には珍しかった。江戸に在府中には、城内で將軍以下重臣の前で演奏もあった。座樂という。その曲目は太平調、桃花源、不老仙、楊香、寿星老、万歳樂など完全に中国風のもので、楽器もまた中国のものそのままだが、三線、四線、長線、三味線、の加わる点に特色が見える。踊りも行われ、網打踊、打組踊、御代台口説、四つ竹踊などがあり、唐踊には打花踊、和番、風箏記などが演じられた。こうして琉球の使節団のすべては、中国文化そのものとして日本に映じていた。」（『江戸時代図史 南島編』）

仮説4について（辺土名さん）

「江戸上りのルートは、まず大阪まで船で行き、大阪から陸路で江戸に向かう。目的はやはり、異国を支配下においていることをしらしめるため。」

仮説5についての調べなし

仮説6について（伊波さん）

「樂童子の服装については『これ大方美少年なり、十四歳より十六歳まで唐織のかぎりなき美服を着す』と記してある。このことから樂童子は男である。」

仮説7についての調べなし

ここに紹介したものは、仮説について図書館などで調べたものである。この中で仮説1について調べたものは7名、仮説2はなし、仮説3は5名、仮説4は4名、仮説5はなし仮説6は5名、仮説7はなしとなっている。このグループが図書館で調べたものは、説得力のある仮説に関連するものが多く、その中でも行列の服装や樂童子、楽器への関心が高くなっている。この結果はグループ内での議論が割と活発に行われ、その中で説得力をもった仮説に基づく形で調べ学習が展開していったと思われる。

⑦以上の作業とこの2日間の講義からえた地見に基づいて、『博物館へおいでよ』の該

当部分を改定して下記に示せ。

ここでは、2名の改訂案を紹介する。

比嘉案：観察したものから、その社会的な事象の意味にまで理解を広げさせようとしたもの

～江戸上りについて～<改訂版>

江戸上りとは何のことだろう？それは薩摩藩（島津氏）に支配された琉球王国が国王が代わるたびにその即位を感謝する使節として謝恩使を、江戸の將軍が代わるたびにこれを祝う使節として慶賀使をつかわすことがならわしになっていました。これらのことと江戸上りといいます。

Q 1. 江戸上りの時の
は琉球人の服装は、どん
のな感じの服でしょう。

Q 2. 服の中に手を入れて
いる人がいますが、それは
どのような国の人と似てい
ますか。

Q 3. 茶会の時の樂器
どこでつじゅられたも
かな？

*ヒント：どこかの国の服と似ている。

Q 4. さてこの問題を考えたら、次はなぜ江戸上りの行列で琉球人はこのような服装をしていたのだろう。自分なりに考えてみよう。

山木戸案：まず観察を先にもってくるのか、それとも調べさせてから観察させるか、ワークシート作成上の基本論点を含むもの。

13江戸上りとは何かな？



(改訂の理由)

なぜこの部分を改訂したのか：最初の問題は「①次の琉球楽器の中から 図の中にあるものを選んで○をつけよ。」だったが、これでは予想される子供の反応が 単純すぎたので、まず実際史料等で名前を知り、そしてその楽器の名前の特徴などから図がないような場合でも選択できるようにする。

山木戸さんのワークシート作成には積極的なものを感じるが、次のような点で検討を要する。

- ・観察を行う前に調べることを優先させたほうがよいのか：博物館で大切なことは物からスタートされることであるが、観察以前に調べ学習をとり入れることにより、観察への接近に各人の差が影響してこないか。
- ・ワークシートにある楽器の図と展示資料を比べ、展示資料に出てくる楽器を細かく観察させることの方が、むしろ次の学習へのステップにつながるのではないだろうか。

2. 教師側が提供したワークシートの有効性：共有部分の創出をどのようにしかけるか。

今回受講生が使用したワークシートは、琉球大学教育学部の里井先生が打ち合わせをもとに作成したものである。このワークシートを使って学習を開いてみて、この

ワークシートの果たした役割についても述べておく必要がある。

このワークシートは7項目からなり、大きく分けると①疑問の記録（1と2）、②仮説の記録（3と4と5）、③仮説の検証（6）、④具体的な提言：ワークシートの改訂（7）で構成されている。

この中で、集団学習において有効であったのは、疑問の記録と仮説の記録である。疑問の記録は、個人の疑問（1）とグループの人が疑問に思ったこと（2）の二つで構成され、グループの他のメンバーがどのような視点からどのような疑問を抱いているのか情報の共有が行われるようになっている。さらに仮説の記録は、個人の仮説（3）、グループの仮説（4）、説得力のある仮説（5）の三つで構成され、グループのディスカッションを媒介に何を検証すればよいのか共有部分をもとに検証の方向に向かうようになっている。疑問と仮説におけるグループを意識したこの方法が、博物館資料に関するグループ学習のステップになりうることは間違いない。

3. 万国津梁の鐘グループと江戸上りグループの学習の違いは何か：ディスカッションによる共有部分創出の役割

同じワークシートを使って博物館学習を進めたにも拘らず、万国津梁の鐘を学習の対象としたグループと江戸上りを学習の対象としたグループとでその後の学習の展開に違いが見られるので、もう一度両グループの違いを整理し、その上で検討してみることにする。

	万国津梁グループ	江戸上りグループ
①物を良く見て思ったこと。	鐘の形態やその意味に関するものが多く、それに製造者・製造方法・原料に関するもの、別の鐘との比較や同時代における鐘の製造を前提にした疑問、銘文の内容に関するもの、鐘の運搬に関するものの順となっている。	江戸上り行列図の具体的な観察に関するものが圧倒的に多く、次に楽童子の性別・江戸上りのルートや滞在に関するもの、薩摩の役人や人足、行列への参列者の服装、行列のスタイル、江戸上りの財政的な負担の順となっている。

	万国津梁グループ	江戸上りグループ
④あなたのグループの人が提示した仮説	7つの仮説	8仮説
⑤仮説をぶつけあってどの仮説に説得力がありましたか。	<p>説得力のある仮説とその理由を書いているのは5名中2名のみ。説得力のある仮説としては3つ挙げている。</p> <p>仮説1.尚泰久王が、万国津梁の鐘をつくらせたのは当時の中中国と日本との関係がうまくいっている状態が、永遠に続くよう願ってのことではないだろうか。そういう意味でも、この鐘には同時期に鋳造された鐘の中でも大きな思いをはせていたのではないか。</p> <p>仮説2.尚泰久王の名が鐘に記されていないのは、同時期に鋳造された他の鐘とおなじようにつくられたためで、日本や中国などからとりよせるか、あるいは鋳造する人を呼び沖縄でつだうか。当時歌舞伎の女形のようくらせたかそこはわからないがに芸をするのは男でそれも公式の場多くの梵鐘がその時期につくらでも通用するような芸の持ち主なら、れたのではないだろうか。</p>	<p>説得力のある仮説とその理由について11名全員が書いている。</p> <p>仮説1.(行列の服装は)、薩摩の権威が他国に及んでいることを見せるため。</p> <p>仮説2.書道をしている人が歌を詠んでいるというのは、説得力があると思う。</p> <p>仮説3.舞楽図で使っている楽器は中國伝来の琉球のもの</p> <p>仮説4.陸路なのは、金を使わせて琉球が勢力をつけさせないように。</p> <p>仮説5.かごではなくみこしなのは、琉球の使者をさらしものにするため。</p> <p>仮説6.(樂童子は)士族は男ではないか。当時歌舞伎の女形のようくらせたかそこはわからないがに芸をするのは男でそれも公式の場多くの梵鐘がその時期につくらでも通用するような芸の持ち主なら、教養を身に付けた人物であろうと推測される。このことから士族であると思われる。</p>

	万国津梁グループ	江戸上りグループ
	<p>仮説3.梵鐘は仏教の法具であるから、このころ琉球国に仏教が繁栄したことを表しているのではなかろうか。</p> <p>仮説4.藤原国善が鐘を造った。</p> <p>仮説5.沖縄で鐘が造られた。</p>	<p>仮説7.琉球人が逃げないようにとうのは考えつかなかった。逃げられて薩摩の仕打ちを口外されたら困だろうということを考えたら納得した。</p>
⑥仮説を検証するため博物館の他の展示物や県立図書館や琉球大学の図書館などで調べたことをもとに書きましょう。	⑦で紹介した説得力のある仮説に関して調べたものは二名。残り3名は、それと関わりのないものを調べている。	仮説1について調べたもの7名、仮説3は5名、仮説4は4名、仮説6は5名となっている。仮説2・5・7は調べたものなし。

上の表で両グループのメンバーが何を調べたのか比べて見ていくと、説得力のある仮説とそれほど関連させずに学習を進めていったのが万国津梁の鐘グループだとすると、江戸上りグループは説得力のある仮説と関連して学習を進めている。

この違いが、一体どうして起きたのか考えてみると、対象となる博物館資料の持つ役割も無視しえないが、一番大きな影響を持ったのはグループによるディスカッションと思われる。今回8グループの学習すべてに付き添って見学することはできなかったが各グループにおける集団学習においてはディスカッションによる共有部分の創出が、その後の展開に影響をしていると思われる。

しかし今回は8グループのうち2グループのみの考察にとどまったので、何を調べたかについては対象の問題が大きく影響したのかそれともディスカッションの問題が影響したのか、その結論については今後も再検討を要するであろう。またこの8グループの中で、丸木船とハギ舟を対象としたグループは、具体的な観察の面で興味深い点を含ん

でいたが、今回は紙面の都合で紹介することができなかった。それから首里那覇港図の屏風を学習の対象としたグループについては、観察の対象そのものの広さからくる問題点も生じており、何に焦点をしづらせて学習を深めさせるのか別の課題も存することを付記しておく。

III. 発見に向かわせる学習活動をどう展開していくのか

今回紹介した二つの事例すなわちボランティアによる与喜屋ノロの学習と「物の観察から『博物館へおいでよ』を改定しよう。」の学習から、どのようなことを結論として導きだすことができるのかが最後の課題である。

先述したように、ボランティアによる与喜屋ノロの学習においては、“見えるものから見えないものまで観察を広げて”というテーマで、写真パネルの観察をもとにした質問づくり→検証Ⅰ：解明部分と未解明部分の整理→検証Ⅱ、歩いて確かめる→まとめという学習活動を行った。また「物の観察から『博物館へおいでよ』を改定しよう。」の学習では観察をもとにした個人の疑問づくり→グループ間の疑問の共有→個人の仮説づくり→グループの仮説の共有→説得力のある仮説の確定→ワークシート作成の具体的な提案を行う学習を行ってきた。この両者から何を学ぶことができたのかここで結論を述べることにする。

1. 博物館資料そのものに目をむけるよう具体的に観察する方法を学ばせる。
今回の二つの学習に共通するねらいは、博物館資料そのものに目をむけ具体的に観察する方法を学ばせることであった。

しかし実際に学習を進めてみると、ボランティアが観察をして作った質問づくりには与喜屋ノロに関する具体的な質問もあるものの、ノロ一般に関する質問が多く、“物を直接見る活動”そのものよりも、自分のこれまでの体験をもとに、自分の頭の中で抽象的に思考したものと写真パネルとを関係づけて学習を行っていることがはっきりしている。このように抽象的に思考した中から生まれてきた一般的な質問づくりは新たな次の発見には結びつきにくいが、ノロ一般と具体的な存在としての与喜屋ノロとをつなぐ働きをしており、ノロという言葉を初めて聞くような学習者にとってはレディネスとしての役割を果たしていると思われる。

一方学生のグループを見ると、万国津梁グループ、江戸上りグループのいづれも具体的な観察をもとにしたものが多く、ボランティアグループとは違った結果を示している。

2. 観察から得られた具体的な質問づくりが、新たな発見に結びつくことを理解させる。与喜屋ノロの写真パネルを見ての質問づくりをみると、「このノロは、どこの出身か」とか「この写真の人は何という人。」とか「写真を移した場所はどこか」といった具体的な質問がある。このような質問には、それを調べるうちに展示室だけでは分からぬ次の方向へ学習が発展する要素が含まれており、この学習を計画した館側の 枠を越えて、新しい発見につながる可能性もある。

例えば神

奈川県にある平塚市博物館では、昭和62年度から「相模川を歩く会」を実施してきたが、この活動を続けていくうちに参加者は、館側が考えていた以上に様々な学習上の発見を体験し、やがて1994年には職員と参加者が共同で「相模川事典」を世に出すまでにいたり、現在では「古代遺跡を探す会」の活動にもその経験 が生かされるようになってきている。

我々はどのような質問づくりから、新たな発見に結びつく活動が生まれてくるのかこれからも検討を積み重ねていく必要があると思われる。

3. グループによる博物館学習においては、ディスカッション等による共有部分の創出が必要である。

ここで用いている共有部分という聞き慣れない言葉について初めに説明をしておく必要がある。二つの学習活動をもとにして言うならば、与喜屋ノロの学習においては、一人一人の作った質問づくりの発表を指しており、ワークシートづくりの学習においてはグループの質問づくり、グループの仮説づくり、説得力のある仮説づくりを指している。つまり自分の考えと他人の考えを突き合わせることにより、自分とは異なる視点や考え方のことを共通理解することである。とりわけ後者の学習活動においては、説得力のある仮説であるか否かについて判断するには、お互いのディスカッションを媒介としなければならず、共有部分の創出にあたっては、ディスカッションが大きな役割をもっている。ワークシートづくりにおける万国津梁グループと江戸上りグループが、どの仮説の検証を調べようとしたのかをみるとグループ内におけるディスカッションの成否が影響を及ぼしているように思われる。

4. 歩いて確かめる学習は、博物館資料からの展開を深化させる。

二つの学習活動はいづれも博物館資料を出発点とするが、歩いて確かめる活動はそれぞれの認識を深める働きをしている。

例えばボランティアの学習では、質問づくりを文献で調べて分かったつもりのものが、

野外踏査に出ていざ調べてみると確定できないものがあったことである（例：中城城内の拝所の位置確認など）。また野外踏査に出て実際に歩いてみたことでイメージが具体的になり、“祭祀のときのノロの場所移動”から“拝所を回る順番は”という順路に関する質問が生まれたりしている。

ワークシート作成の学習においては、進貢船のグループが歴史展示室にある進貢船の構造を調べるために、企画展示室側にあった馬艦船と比較しながら観察や調べ学習を行っている。文献資料のみならず歩いて確かめることの重要性にも気付かせ、博物館資料からの展開については、いろんな方法があることを理解させることも大切である。

[脚注]

- 注1 研修の内容については、前田真之「インタープリテイションとボランティアガイド」（『沖縄県立博物館紀要』第20号）を参照のこと。
- 注2 授業の展開については、前田真之「発見に向かわせる解説：物から学ぶ」（『沖縄県立博物館紀要』第21号）を参照のこと
- 注3 首里那覇港図の屏風の質問づくりについては、前掲20号論文54p～57p、60p～62pを参照のこと
- 注4 前掲20号論文62p～63p
- 注5 John H. Falk and Lyn D. Dierking, *The Museum Experience*, Whalesback books, at 76p～77p (1992)
アメリカに於いて長年博物館来館者の行動分析を行ってきたジョン・H・フォークとリュン・D・ディーアーキング氏によれば、「来館者は博物館資料を見て、『それは何？』『どこから来たもの？』『どれだけの値打ち？』『新しいとき、どのように見えたの？』と問い合わせる。しかし「この仕掛けが歴史の進路をどのように変えたの？」とか『この絵画が、なぜ抽象絵画において画期的だと言われたの？』とか『これらの事例は、いかなる形で慣性保存の法則を示しているのか』と問い合わせることはまずない。我々は、来館者が大人であれ子供であれ、展示を抽象的に見るよりも具体的なレベルで見ていることを議論すべきであった。」（太字は筆者による）と指摘している。
- しかし今回のボランティアの質問づくりについては、一般的抽象的な質問もかなりあり、ジョン・H・フォークなどの指摘するものとは、やや違った傾向を示している。この原因については、別に検討を要する課題であることを付記しておく。
- 注6 琉球国由来記にも登場してくる照屋の嶽、ギイス嶽のうち後者はこれまでほきりしなかったが、中城城跡整備計画の関係者が、地元関係者や研究者の協力を得て行った最近の調査で、場所の確定が行われている。中城城跡の南東にあ

る古墓群の中にある。

注7 平塚市博物館が、「相模川を歩く会」の活動の集大成として1994年に発刊している。平塚市博物館の学芸員も、この会の活動が館側の予想を越えて発展するとは思っていなかったようである。ここにおける活動も、発見に向かわせる学習活動の一つとして検討に値する。

注8 「平塚市遺跡分布調査報告 1」(『自然と文化』1994年17号)